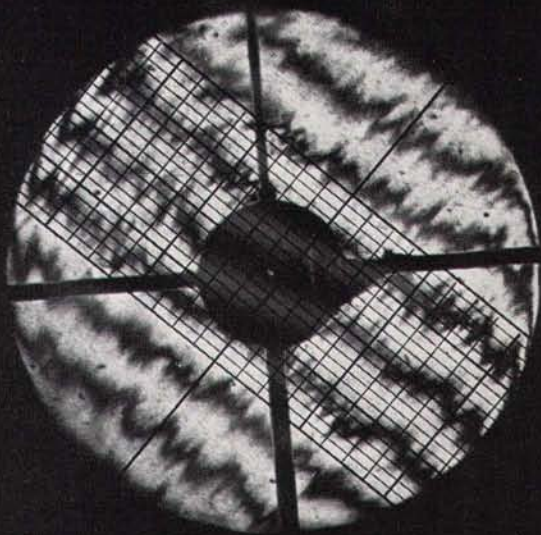
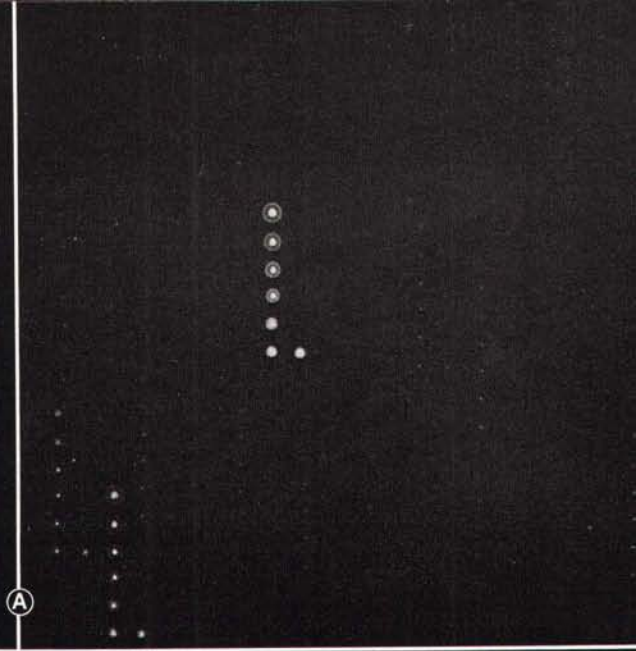
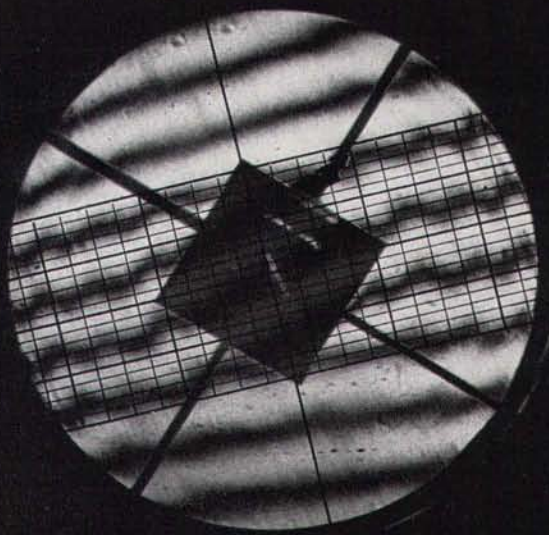
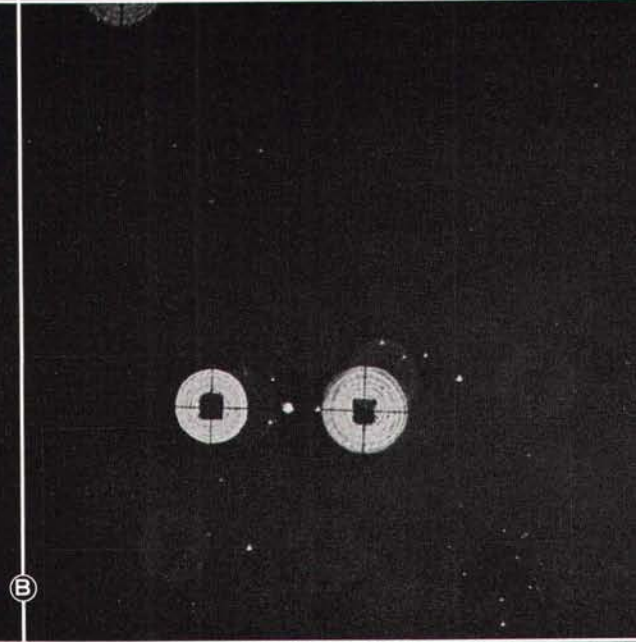


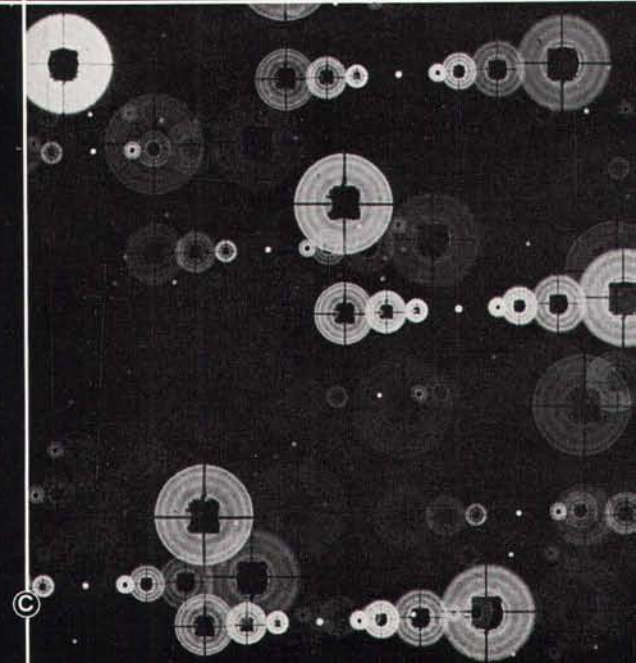
A

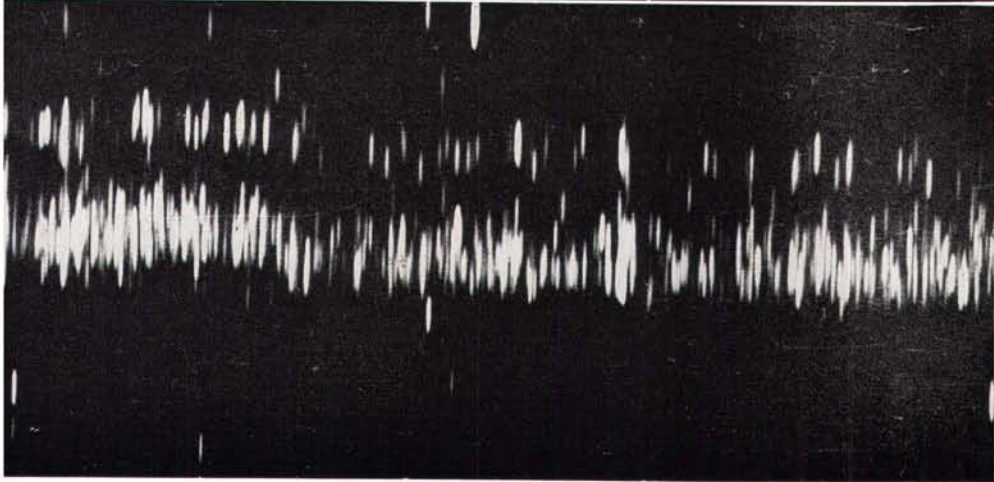
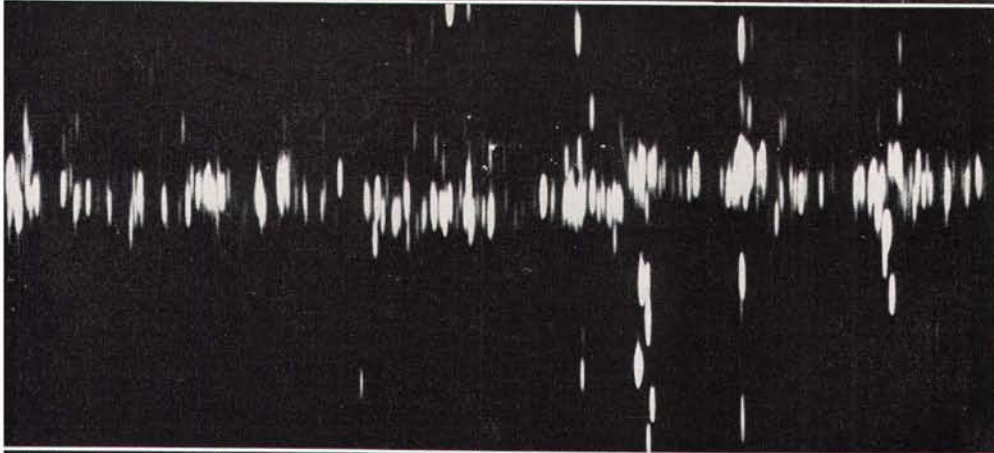


B



C





（前頁左側）

シュミット補正板のシャリングテスト像，正しくできているときは規則正しい縞模様ができる。(A)はテンプレートによる研磨によるものでみだれが多く，(B)はシャリングテストの結果を参考に修正したもの，(C)はN.C.(数制御)方式値によって研磨したもので，みだれが少なくなっている。

（前頁右側）

左の補正板を使った星像テスト，焦点をずらせながら何回かの露出をしているので，一番小さくなったのが焦点の合った星像である。倍率6.8倍。(A)は輪帯収差が大きく，(B)は改善されシャープであるがみだれがある。(C)は整った，しかもシャープな星像を示す。

（上段）

野辺山太陽電波観測所の全景。左側に東西系のアンテナがならんで見えている。背景は八ヶ岳連峰。

（左側中段）

モニター用カメラによる太陽バーストの記録。1970年7月23日のノイズストームで電波源は1つである。

（左側下段）

上と同じタイプのバーストであるが電波源は2つ。

（右側）

データ処理装置。

（本誌甲斐氏の稿を参照のこと）

天文学会秋季年会
京都にて開かる



▲ 年会会場の京都府立文化芸術会館ホール



◀ 会館内のロビー

▼ 年会会場における記念撮影

